

Manfred Engel und Dieter Lamping (Hrsg.):
Franz Kafka und die Weltliteratur.

川 島 隆

なぜ今さら「カフカと世界文学」なのか。この、いささか大上段に構えた言葉をタイトルに冠した本書を目にすると、奇妙な既視感に襲われる。それは、すでにベルト・ナーゲルが同名の書物 [Nagel 1983] を著しているから、というだけの理由によるのではあるまい。そこでナーゲルは比較文学の手法により、カフカに影響を与えた／カフカに影響を受けた作家たちとカフカ文学の関係を明らかにすることを試みたのだった。それから 20 年あまり、文学研究をめぐる状況は大きく様変わりしている。ごく少数の作家を「世界文学」の巨匠として殿堂入りさせ、ごく少数のテキストを「世界文学」の正典として特権化し、普遍的な価値があるかのように見なすことにあまり疑いの目が向けられなかった時代は過ぎ去り、これまで文学研究という制度が自明のものとして前提にしてきた差別的な構造、とりわけヨーロッパ中心主義を相対化するための作業が、今日の文学研究の現場で積み重ねられている。そこでは、いわば「世界文学」の概念自体が、ある種の更新を迫られていると言えよう。——そういった状況変化に対して、本書はどのような応答を示してくれるのだろうか。

世界≡ヨーロッパ

その疑問の答えを知るため、さしあたり本書を実際に開いてみよう。この『カフカと世界文学』は、リルケ研究者として名高いマンフレート・エンゲルと、20 世紀ヨーロッパのユダヤ文学の系譜をたどった著作 [Lamping 1998] のあるディーター・ランピングとが共同で編んだ論集である。二人は、これに先立って『リルケと世界文学』[Engel/Lamping 1999] を出している。そちらの本の構成と同様、『カフカと世界文学』も全体が大きく三部に分かれており、それぞれ①カフカが読んだ「世界文学」の作家とカフカ文学の関係、②後世の作家のカフカ受容、③モダニズム文学の流れにおけるカフカの位置、というテーマが設定されている。(ただし、第二部と第三部の区分は、必ずしも明らかではない。)

扱われている作家のラインアップを一瞥すれば否応なく気づかざるをえないが、ここで言われている「世界文学」とは基本的に「ヨーロッパの世界文学」のことである。非西洋の文学はほぼ

視野から除外されており、アメリカ文学にかろうじて僅少な分量が割り当てられている。しかも、圧倒的な比重を占めるヨーロッパ文学のうちで、ドイツ語圏の文学が多数を占めているのだ。カフカ受容を扱った第二部においてその傾向が特に顕著であり、オーソン・ウェルズによる映画化作品を扱った論文（サンドラ・ポッペ）一つを除けば、全てドイツ語作家が取り上げられている。

文学史の逆襲？

続く第三部においても、「実存主義」「不条理」といったテーマを軸にした文章が並び、本書のある意味で回顧的な性格をよく表している。もっとも、その傾向は、必ずしも今日の文学研究をめぐる状況への無知や無関心にもとづくものではなからう。むしろ、他ならぬその状況に対する反動が、この書物を生み出したのだと思われる。その事情は、例えば、編者の一人エンゲル自身が同書に寄せた論考からも明瞭に窺える。そこでエンゲルは、リアリズムの解体および内面・外面の融合といったモダニズム文学の特徴からカフカの文学史的な位置を考察する一方、近年の文学研究が社会学など異なる学問領域への依拠を強めていることを批判的に見る立場を明瞭に打ち出すのである。彼は、そうした学際的アプローチへの志向を「敗北主義」（S.248）と断じつつ、いわば文学による・文学のための文学史を取り戻そうとしているかのようだ。この立場は、最近やはり比較文学的な観点から編まれたカフカ論集『テキストの交通——カフカと伝統』（Liebrand / Schöblier 2004）が、文学外の現象をも幅広く視野に入れつつカフカ文学を捉え直すことを基本方針に据えていたのとは、まさに対照的である。

古い革袋に新しい酒を

とはいえ、ものごとが単純に後戻りすることはない。エンゲルらの編集方針にもかかわらず、この論集には実のところ、旧来の研究の枠組みを打破するような要素が入り込んできているのだ。本書の第一部においては、ゲーテ、クライスト、キルケゴール、フローベール等々、カフカ研究者にとっては見慣れた名前が並んでいるが、個々の論考の中身は決して昔ながらのものではない。なかでも、「カフカとゲーテ」を論じたゲルハルト・ノイマンの提供する視点は刺激的である。彼は、カフカにとっての二つの模範、すなわち「世界文学」たるゲーテ文学と、「マイナー文学」としてのイディッシュ文学のあいだの緊張関係に着目し、そこに19世紀から20世紀にかけての「公共性の構造転換」をめぐる問題系を重ね合わせる。のみならず、村上春樹の『海辺のカフカ』の主人公——本書では、なぜか一貫して「カフカ・ナムラ」（S.64f, 298）と呼ばれる少年——の生活に、21世紀の高度消費社会における公共圏の崩壊というテーマを見て取り、そこからまたカフカ文学とゲーテ文学を逆照射することさえ試みられている。

カフカとイディッシュ文学の関係については、ノイマンとは別にゲルハルト・ラウアーが独立

した論考を寄せている。そこでラウアーは、カフカが触れた可能性のあるイディッシュ演劇なるものが、実際には伝統的にユダヤ社会に存したものではなく、19世紀後半のブルジョワ社会の産物に他ならなかったことを強調し、イディッシュ演劇へのカフカの関心を、もっぱら当時のネオ・ロマン主義的な思潮に棹さすものとして位置づけている。その議論は必ずしも精緻なものではないが、イディッシュ演劇との出会いによってカフカが「ユダヤ性」に目覚めた、という一つの神話の解体を試みたものとして、一定の評価に値しよう。また、カフカの北欧文学受容を論じるリッチー・ロバートソンも、あいかわらずの堅実な仕事ぶりを見せている。彼は、1980年代から90年代にかけて興隆したジェンダー論的なカフカ研究の成果を批判的に継承しつつ、カフカにおけるハムスンやストリンダベリの受容を捉え直してみせている。

＊

その他、カフカと現代文学に関しては、まずヨーン・ノイバウアーの論考が、かつて社会主義体制下の東欧でカフカを早くから評価していたセルビアの作家ダニロ・キシユおよびハンガリーの作家エステルハージにおけるカフカ受容のあり方を考察して、啓発的である。南アフリカの作家クツツェーを扱った論文（リュウディガー・ツィムナー）は、やや問題の整理に終始している観はあるものの、議論の出発点として注目に値する。小説家として、またそれに先立って文学研究者としても長年カフカと取り組んできたクツツェーの事例は、彼の出身地である南アフリカの政治的状况を考えあわせると、特にカフカにおける「マイナー文学」の問題を再考するに際し、興味深い材料を提供すると思われるからだ。

先に述べたように、ヨーロッパ外ないし非西洋の「世界文学」におけるカフカ文学の位置は、本書の盲点となっている。その点を、エスター・クラウスによる巻末の文献セレクションは一定の範囲で補っており、本書の価値を大幅に向上させている。

(Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2006)

参考文献

- Engel, Manfred / Lamping, Dieter (Hrsg.): *Rilke und die Weltliteratur*. Düsseldorf 1999.
- Lamping, Dieter: *Von Kafka bis Celan. Jüdischer Diskurs in der deutschen Literatur des 20. Jahrhunderts*. Göttingen 1998.
- Liebrand, Claudia / Schöblier, Franziska: *Textverkehr. Kafka und die Tradition*. Würzburg 2004.
- Nagel, Bert: *Kafka und die Weltliteratur. Zusammenhänge und Wechselwirkungen*. München 1983.